待つ　　太宰治

教材のねらい

1　選定の理由

「待つ」は、戦争が一人の若い女性の心持ちや生き方に影響を及ぼす過程と顛末を、巧みな語りで伝えていく一人称小説である。太宰は創作活動の中期あたりから女性独白体の作品を発表し続け、男性中心的な語りとは異なる領域に光を当てた。本作は「京都帝国大学新聞」からの依頼だったが時局にふさわしくないという理由で未掲載となり、自著「女性」の巻末に収録して世に問うている。末尾に「(十七年一月)」とあり、アメリカとの戦争が始まった直後の社会の雰囲気に鋭く迫っており、近代２の課題にふさわしい教材として選んだ。

主人公の「私」は、周囲との儀礼的なつきあいに違和感を持ち、母との親密な関係性を大切にして暮らしていたが、「大戦争」が始まり、やるべきことを画一化していく周囲の雰囲気に、不安と孤独を感じるようになる。時代の趨勢に飲み込まれそうになりながらも、しかし「私」は何かを待つという希望を抱き、いつ終わるとも分からない戦争状態を生き延びようとする。「私」は待つ対象について否定を繰り返しながら、結末では読者を含むような「あなた」に直接呼びかける。自由な行動や表現が制限されつつある時代に作家が試みた声なき読者との幽かな連帯の可能性について考えてみたい。

2　指導のねらい

まずは作家に還元しない多角的な視点で、作品を丁寧に読んでいく必要がある。時代状況を丁寧に掘り起こし、「私」の心的葛藤の表れであろう言い直しや長短の文章の繰り返しを読み解くことで、初めて「私」や戦時下の作家の希望の内実は浮かび上がる。孤立した存在や少数者の声の連帯の可能性について生徒たちと共有できるように、「あなた」の重要性を取りこぼさないようにしたい。

(1) 主人公が感じてきた違和感や不安について、「大戦争」が始まる前と後でそれぞれまとめて比較する。

(2) 「大戦争」が主人公の言葉選びにどのような影響を及ぼしているのか分析する。

(3) 主人公が待つものの変遷を丁寧に追うことで、その希望の内実について考えを深める。

(4) 「あなた」に呼びかける意味を検討し、読者側から作品を主体的に捉え返す。

3 評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア
(2) 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。〔知・技〕(1)イ
(3) 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。〔知・技〕(1)ウ
(4) 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。〔知・技〕(1)エ
(5) 我が国の言語文化の特質について理解している。〔知・技〕(2)ア
(6) 「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B(1)ア
(7) 「読むこと」において、作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。〔思・判・表〕B(1)イ
(8) 「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。〔思・判・表〕B(1)ウ
(9) 「読むこと」において、作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。〔思・判・表〕B(1)エ
(10) 進んで小説の表現の仕方・特色をつかみ、成立した時代や背景などさまざまな角度から作品を考え、学習課題に沿って、「私」が待っているものについて考えようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕

指導計画案

展開	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
導入	1 「待つ」とはどのような行為か考えさせる。 2 物語のかたち（一人称の語り）に注目させる。 3 作品全体の内容を大まかに把握させる。	① 二一〇ページの「導入の問い」をもとに「待ちたいもの」を考える。 ② 段落分けを行った後、簡単な感想文を書き、物語のかたち（誰が物語を進行・展開しているのか）を考える。思判表 ③ 小説に描かれた時代背景を理解する。知技	① 生徒に自身に「待ちたいもの」は何かを尋ね、小説のタイトルでもある「待つ」という行為が一般的にどのような意味を含み持つものか考えさせる。 ② まずは作家に還元せず、小説そのものに注目して簡単な感想文を書かせる。また、「待つ」は「私」による一人称小説で、出来事の当事者である「私」の視点で物語が展開することを生徒に伝える。 ③ 細部の読解は次の「展開」で行うが、簡単にこの小説の時代背景をおさえておくことが、生徒たちが小説を理解することの一歩になる。たとえば小説の中に時代を表す言葉があるか問いかけるなどして、「大戦争」という言葉に注目させたい。
展開	1 「私」の心的葛藤を言い直しや長短の文章から読み取らせる。 2 「大戦争」とは何か、その「大戦争」の始まりに「私」が接していることを把握させる。 3 「私」の違和感や不安が「大戦争」が始まる前と後でどのように異なるか考えさせる。 4 「大戦争」が「私」にどのような影響を及ぼしたのか理解させる。	① 〈第一段〉（初め～二一〇・2） 「私」が「誰とも、分からぬ人を迎えに」いくと語り始めたことに注目する。思判表 ① 〈第二段〉（二一〇・3～二一二・2） 「私」が語る駅の情景を把握する。 ② 「私」が人や世の中にどのような感情を抱いているのか理解する。思判表 ③ 「大戦争」とは何か理解し、「私」の違和感や不安が「大戦争」が始まる前後でどのように異なるかまとめる。知技・思判表	① 「待つ」という行為は一般的に期待を込めた意味合いで用いられること（導入で学習済み）を振り返る。また迎えに行くという行為は、たとえ初対面であれ、相手がどのような人物かある程度の情報を得たうえで行うものだが、「私」は「誰とも、分からぬ人」（二一〇・1）を迎えるという点に注目する。 ① 改札口は、目的地（家路や次の交通手段等）に向けて人々が同じ行動をとる場である。「一様に」（二一〇・6）「脇目も振らず」（二一〇・7）というように同じ動きをする人々と、それを眺める「私」という対置、両者の差を板書などで示したい。「私」が人を恐れる背景には「言いたくもない挨拶」（二一一・2）、「当たらず障らずのお世辞」（二一一・4）、「もったいぶったうそ」（同）が示すように、儀礼的な「世の中」（二一一・6）への違和感がある。それゆえ「私」は違和感を抱く必要のない母との親密な関係性を大切にしていることを把握させる。 ② 「大戦争」（二一一・11～12）とは具体的に何を指すのか、末尾の「（十七年一月）」を踏まえた上で当時の資料等を用いて立体的に説明する。あるいは、生徒に戦時下の人々がどのような役割を担わされたのか調べさせてもよい。その上で、「大戦争」が始まったことで人との儀礼的なつきあいへの違和感から、戦時体制により画一化されることに対する不安へと「私」の心情が変化していることに注目する。

時限	展開	まとめと発展
指導上の重点目標		1 「私」が待つものの変遷を追い、その希望の内実について考えを深めさせる。 2 「あなた」という呼びかけが持つ可能性を考え、「私」の物語を主体的にとらえ返す視点を身につけさせる。 3 言語活動への発展をはかる。
学習活動	①〈第三段〉（二一二・3～二一三・1）第一段落で示された「私」の行動を、第三段落とあわせて考える。思判表 ②「私」に生じた心的葛藤をまとめる。思判表 ③「私」が抱える孤独感を読み取る。思判表 ④「私」が自分に対して否定的な表現を繰り返し用いている点に注目する。知技	①〈第四段〉（二一三・2～二一三・7）「私」が「待つ」ものとして何を挙げているかまとめる。思判表 ①〈第五段〉（二一三・8～終わり）「私」が「待つ」ものとして何を挙げているかまとめる。思判表 ②「胸を躍らせて待っている」とはどのような様子を表現しているか考える。思判表
指導上の留意点	①第一段落を振り返り、「誰とも、分からぬ人」（二一〇・1）を迎えに行くという行為の背景に「家に黙って座っていられない思い」（二一二・3）があったことを理解させる。「大戦争」が生活や社会を覆っていくなかで、「私」が得体の知れない焦燥感や不安を抱いていることを指摘する。 ②「私」が「期待」や「恐怖」「諦め」「覚悟」（二一二・5～8）と、心の内を次々言葉を置き換えて言い表し、葛藤している様を生徒に認識させたい。また、「窒息する」（二一二・9）という表現からは「私」が大切にしていた日常が「大戦争」に浸食されていく様がうかがえる。 ③「白昼の夢」（二一二・10）、「望遠鏡を逆にのぞいたみたい」（二一二・11）とは、「私」がどのような状態におかれていることを意味しているのか生徒に考えさせる。 ④第三段落では、「けしからぬ空想」（二一二・8）、「大変淫らな女」（二一二・12～13）、「軽はずみな空想」（二一二・14～15）「不埒な計画」（二一二・16）というように、「私」が自分を（自分が考えたことを）否定的に捉える表現が繰り返し用いられている点に注目したい。ここからは、「大戦争」が、個人の考えにも制約を与えるものだということが読み取れよう。	①これまでも「私」は「誰を待っているのでしょう」（二一〇・11）、「何を待っているのでしょう」（二一二・12）と自ら問いかけているが、この段落では「待つ」ものを挙げては否定して、答え（の候補）がずらされていく点に注目する。 ①第四段落と同じく、ここでも「私」は「待つ」ものに思いを巡らせている。ただし注意したいのは、それが第四段落で見せたような否定とは異なり、「もっと和やかな、ぱっと明るい、すばらしいもの」（二一三・8）をより具体的に捉えようとするための模索であるという点である。そしてこれ以降、「私」が誰を／何を待っているのか問わないことにも注目したい。 これまで否定的な表現を用いながら語ることの多かった「私」が、「胸を躍らせて待っているのだ」（二一三・10）と言う点に注目する。胸を躍らせるという表現からは、期待や希望を込めて「待つ」様子がうかがえる。先の①に示したように「私」はもう誰を／何を「待つ」のか問おうとはしない。その姿からは、「私」が周囲との違いに不安や孤独を感じて葛藤しながらも「待つ」ことに希望を見出す様がわかる。

時限	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
まとめと発展		③「あなた」に呼びかける意味を考える。思判表 ④言語活動1に取り組む。主態 ⑤言語活動2に取り組む。主態	③ここで「私」が語りかける「あなた」（二一三・14）に注目する。第四段落にも「あなた」（二一三・5）は出てくるが、その「あなた」が「私」に声をかけるかもしれない人物に限定されるのとは異なり、第五段落の「あなた」は、「胸を躍らせて待って」（二一三・10）いた何かであるとともに、物語の外にいる「あなた」、つまりこれまで「私」の物語を読んでいた読者をも指し示すような意味を持つだろう。この「あなた」は、物語を外から眺めていたはずが物語に呼び込まれ、「私」が連帯をはかろうとするような効果を含んだ呼びかけであることを生徒に理解させる。 ④この物語の語り手が「二十歳の娘」（二一三・13）であることに注目する。「大戦争」は同世代の男性を召集し、戦地へ連れて行った。そして女性も銃後を守る存在として、〈銃後〉や〈報国〉の中に組み込まれ、戦争を後方から支援する担い手であることが求められていた。そうした皆が一つの方向に向かうことを強いられる戦時下において、「待つ」ことをやめない「私」の批評性を理解させたい。 ⑤「私」の気持ち」は小説を改めて振り返ることで考えたい。「作家の立場」では、検閲（軍部の検閲や出版社の自己検閲）によって表現が制限されるなか、「待つ」の内実を明確に示さないことが、むしろ読者に「待つ」の内実をほのめかす役割を担っているということを生徒につかませたい。加えて、ここでは作家紹介の時間を設け、戦時下の太宰治の創作活動を振り返ってみたい。

作者

太宰治

明治四十二（一九〇九）年～昭和二十三（一九四八）年。小説家。本名・津島修治。青森県北津軽郡金木村（現・五所川原市）で父・源右衛門、母・夕子（たね）の第十子六男として生まれる。津島家は県内屈指の素封家で、源右衛門は県会議員、衆議院議員、貴族院議員をつとめた人物であった。大正十二（一九二三）年、青森中学校に入学。昭和二（一九二七）年に弘前高等学校に進学、芥川の死に衝撃を受けて生活が変化し、小山初代（紅子）とも親しくなる。昭和五（一九三〇）年、東京帝国大学に進み、井伏鱒二に師事。その一方で非合法活動にも参加。同年、銀座のカフェーの女給田辺あつみ（田部シメ子）と知り合い、鎌倉腰越町の海岸で心中をはかりあつみが死亡。十（一九三五）年には大学落第が決定、新聞社の入社試験にも失敗し、鎌倉で縊死を図るが未遂に終わる。同年、腹膜炎の鎮静に医師が用いたパビナールがもとで翌（一九三六）年には中毒状態に陥り入院。十二（一九三七）年、入院中に起きた初代の過失を知り、群馬県水上の谷川岳で初代と心中を図るが未遂。初代と離別後、十三（一九三八）年に井伏が滞在する山梨県御坂峠に滞在し、翌（一九三九）年石原美知子と結婚。同年九月に東京府三鷹村下連雀に移転、創作に邁進した。二十（一九四五）年には青森の生家に疎開。翌（一九四六）年、三鷹に戻り、流行作家として原稿に追われた。二十二（一九四七）年には下曽我に住む太田静子を訪ねた。昭和二十三（一九四八）年六月、玉川上水に山崎富栄と入水。三十九歳で死去。

文学活動

太宰の文学活動を語るうえで欠かせない小説は数多くあるが、初期の「逆行」（昭十）もその一つである。「逆行」は昭和十（一九三五）年の第一回芥川賞候補作となるも、受賞は石川達三の「蒼氓」に決定した。この第一回芥川賞発表の後、銓衡委員の一人である川端康成が「文藝春秋」（昭十・九）の「芥川龍之介賞経緯」に綴った「道化の華」評に太宰が激昂、反駁文「川端康成へ」（「文藝通信」昭十・十）を発表し、さらに川端が同誌十一月号に「太宰治氏へ芥川賞に就て」を発表して、二人の応酬はのちに〈芥川賞事件〉（芥川賞騒動）と呼ばれるようになる。十一（一九三六）年には「逆行」や「道化の華」等を収録した第一創作集「晩年」を刊行。十二（一九三七）年、最初の女性独白体小説「燈籠」を発表、この手法は太宰文学の特徴の一つとなる。十四（一九三九）年には「富嶽百景」「続、富嶽百景」を発表、妻・美知子による口述筆記でまとめられた「黄金風景」（上、下）が発表されたのもこの年である。さらに、愛読者有明淑の日記をもとに「女生徒」も発表、川端康成から絶賛された。十五（一九四〇）年には「駈込み訴へ」や「走れメロス」を発表し順調に創作を続けた。十七（一九四二）年には前（一九四一）年十二月八日をモチーフにした「新郎」、「十二月八日」を発表。十九（一九四四）年には子守の「たけ」との再会をモチーフにした「津軽」を刊行し旺盛な創作意欲を見せた。疎開先の青森の生家から三鷹に戻ってからは流行作家として多忙な日々を送り、詩人の妻による視点で紡がれた「ヴィヨンの妻」（昭二十二）、没落貴族の娘を主人公とする「斜陽」（同）を発表、二十三（一九四八）年には、「如是我聞」や、「人間失格」

を発表した。

作者を解くカギ

太宰治というと、小説に〈太宰治〉を彷彿とさせる人物を登場させ、文壇や読者に向けて自らのイメージを戦略的に作り上げた作家というイメージが強いが、その一方で今回の「待つ」のような女性独白体小説も十六篇発表した。なかでも「女生徒」(昭十四)は、〈芥川賞事件〉で応酬した川端康成が絶賛したことで知られている。この川端による評は、「女生徒」のほか「懶惰の歌留多」(昭十四)についても述べていて実際はかなり長文だが、特に有名なのは、次の部分である。

「女生徒」のやうな作品に出会へることは、時評家の偶然の幸運なのである。そのために、讃辞が或ひは多少の誇張にわたるのは、文学を愛する者の当然の心事である。(略)この女生徒は可憐で、甚だ魅力がある。少しは高貴でもあるだらう。女の精神的なものについて、大凡失望することの多い私は、この「女生徒」程の心の娘も現実にはなかなか見つからないのを知るのである。(川端康成「文芸時評―小説と批評」「文芸春秋」昭十四・五)

加えて、この評の中で川端は「「月下の老人が『人になりたや』酔ひもせず。」と、太宰氏は私にくれた「晩年」の扉に書いてゐる。早熟の才質の疲労の影が見える」「太宰氏のやうな青春は、ただでさへ傷つきやすく、殊に日本では育ちにくい」(前掲)と太宰の過去に寄り添おうとしている。先述の通り、かつて〈芥川賞事件〉の発端となったのが、川端の「道化の華」(のちに「晩年」に収録された)に対する「作者目下の生活に厭な雲ありて、才能の素直に発せざる憾みあつた」(「芥川龍之介賞経緯」「文芸春秋」昭十・九)という評であったことを考えれば、「女生徒」評からは〈芥川賞事件〉からの緩やかな和解という面も読み込むことができよう。それだけ川端にとって「女生徒」は魅力的な小説であったのだ。しかし、「女生徒」と、そのもととなった女性の日記(「資料集第一輯　有明淑の日記」青森県近代文学館　平十二)を比べると、太宰が日記にあった「大人らしい考察」を捨て「〈少女らしさ〉」(小平麻衣子「〈研究へのいざない〉太宰治「女生徒」を読む」「語文」平二十四・六)を作り上げたことは見逃せない。

今回、「待つ」においては「私」の心的葛藤や時代状況との関わりを中心に考察しているが、女性独白体小説全体を読んでみると、太宰という作家が〈女性〉をいかに作り上げようとしたのかという面も見えてくるだろう。

出典

本文は「太宰治全集6」(筑摩書房　平成十)によった。

「待つ」は昭和十七(一九四二)年三月の「京都帝国大学新聞」に掲載予定であったが、時局にふさわしくないという理由で掲載されず、その後、創作集「女性」(博文館　昭和十七)に収録された小説である。太宰が博文館出版部の石光葆に宛てた書簡(昭和十七年二月二十日付、「太宰治全集」第十二巻　筑摩書房　平十一)によると、当初「待つ」を収録する予定はなかったが、校正段階で「女性」の末尾に「待つ」を入れるよう依頼していることがわかる。

出典との異同

教科書表記の統一による変更のほか、〔　〕内の理由により、次の通り改めた。

○「　」→「（十七年一月）」（原文P三八（末尾）、教科書P二一三・15）〔教育上の配慮（初出に拠る）〕

参考文献

＊教師用

○回想・事典・評伝・年譜など

「別冊國文學改装版　太宰治事典」東郷克美編　學燈社　平七

＊全作品のほか、作中人物やキーワード等についても事典形式でまとめられている。

「太宰治全作品研究事典」神谷忠孝・安藤宏編　勉誠社　平七

＊各作品の梗概や作品評価、研究展望がまとめられた事典。

「増補改訂版　回想の太宰治」津島美知子　人文書院　平九

＊太宰の妻による回想。「待つ」に関する記述がある。

「太宰治の年譜」山内祥史　大修館書店　平二十四

＊各作品の脱稿時期や発表年月などについても詳しく書かれている年譜。

○太宰治全般

「太宰治全集」全十三巻　太宰治　筑摩書房　平十～十一

＊小説、随想のほか、書簡、草稿、年譜、著作年表等も収録。「待つ」に関わる書簡も収録されている。

「「私」をつくる　近代小説の試み」安藤宏　岩波書店　平二十七

＊太宰だけではなく、夏目漱石や志賀直哉、川端康成らがいかに小説のなかに「私」を築き上げたのかを分析。近代小説に描かれる「私」と、「あなた」／「君」の関係についても論じている。

○「待つ」および関連作品について

「女性」〈名著初版本複刻太宰治文学館〉　太宰治　日本近代文学館　平四

＊昭和十七年に博文館より出版された創作集を日本近代文学館が復刻。収録された作品は全て女性独白体小説である。「十二月八日」を冒頭に、「待つ」を末尾に収録。

「太宰治「待つ」論―「京都帝国大学新聞」との関連を踏まえつつ」（「大妻国文」所収）井原あや　平十五・三

＊当時の『京都帝国大学新聞』の紙面の有様を追い、「待つ」と他作家の掲載作との差などを確認したもの。

「詩人たち　ユリイカ抄」伊達得夫　平凡社　平十七

＊「京都帝国大学新聞」編集委員でのちに出版社「書肆ユリイカ」創業者となった伊達の回想録。「発禁の思い出」で「待つ」の原稿について述べている。

「太宰治「待つ」覚書き」（「キリスト教文学」所収）　田中良彦　平二十四・八

＊当時の雑誌記事で用いられる「待つ」という言葉が持つ意味を丁寧に追い「大戦争」に揺さぶられる「私」の葛藤を論じている。注において伊達得夫による「発禁の思い出」（前掲「詩人たち　ユリイカ抄」）についても言及している。太宰の書簡にある真杉静枝「妻」との関連も

述べている。

「太宰治と戦争」内海紀子・小澤純・平浩一編　ひつじ書房　令元

＊太宰と戦争の時代の関わりを示した一冊。

「太宰治「待つ」論―成立の背景から見えてくるもの―」

（「学習院大学国語国文学会誌」所収）玉田琴乃　令二・三

＊伊達得夫の「発禁の思い出」（前掲「詩人たち　ユリイカ抄」）をふまえ、現行の「待つ」とは異なる物語が存在した可能性を指摘。

＊生徒用

○「待つ」及び関連作品について

「太宰治　弱さを演じるということ」安藤宏　筑摩書房　平十四

＊太宰の小説に描かれる〈不安〉や〈恐怖〉に読者が共感（共鳴）する仕組み等を論じた書。

「女生徒」太宰治　角川書店　平二十一

＊太宰の女性独白体小説の嚆矢である「燈籠」から戦後の「饗応夫人」まで、十四篇の女性独白体小説を収録。

「コレクション　戦争と文学」全二十巻・別巻一　集英社　平二十三～二十五

＊作家たちが戦争をどのように描いてきたのか、どのように向き合ったのか、様々な切り口で構成されたアンソロジー。第八巻には「待つ」も収録されている。

主題

「大戦争」（二一一・11～12）によって「周囲」（二一一・12）が画一化されていくことに不安を感じ日常を脅かされながらも、言葉にできない何かに希望を託して待ち続ける「私」。

二十歳の「私」は、これまで世間や人と距離をとって過ごしてきた。「言いたくもない挨拶」（二一一・2）や「当たらず障らずのお世辞」（二一一・4）を人と交わし合うことは彼女にとって苦しいもので、それらを避けるためになるべく人と会わずに、つまり「世の中」（二一一・6）とは極力歩調をあわせることなく生きてきた。しかし、そうした彼女の日常は、「大戦争」（二一一・11～12）が始まったことで揺るがされることになる。これまでのように家の中で過ごす居心地のよさに罪悪感を抱えるようになった「私」は、外へ出て駅の改札で誰かを待ってみたものの、自分が誰を／何を待っているのかわかない。自分が「待つ」ものを思い浮かべては否定を繰り返しながら語った先に見つけたのは、「もっと和やかな、ぱっと明るい、すばらしいもの」（二一三・8）であった。それが具体的に何をさすのか、「私」は言語化することができないが、それでも「胸を躍らせて待っている」（二一三・10）のである。彼女にとって「待つ」ことが希望を意味するものであることに注目したい。

構成

段落	ページ・行	段意
第一段	初め〜P二一〇・2〈分からぬ人を迎えに。〉	「私」は毎日、「誰とも、分からぬ人」（二一〇・1）を迎えに省線の駅に行く。
第二段	P二一〇・3〈市場で買い物をして、〉〜P二一二・2〈失ってしまったのです。〉	買い物の後、「私」は必ず駅のベンチに座って改札から出てくる人を見ているが、皆同じ表情と行動で足早に過ぎ去っていく。「私」は誰を待っているのかわからず、待っているのは人間ではないかもしれないと思う。そもそも「私」はうわべだけの挨拶やお世辞を言って取り繕う世の中や人が怖いのだ。だから誰にも会わず家で母と縫い物をする時間を大切にしてきたが、「大戦争が始まって」（二一一・11〜12）周囲の緊張感が増すなか、自分だけが周囲（世の中）とは異なることに不安を感じて「お役に立ちたい」（二一二・1）と思うようになる。
第三段	P二一二・3〈家に黙って座って〉〜P二一三・1〈燃えているような気もする。〉	「私」は落ち着かず外へ出たものの、行くあてもないので毎日駅に立ち寄っている。そんな自分の前に誰かが現れる期待と恐怖が入り混じり、「お役に立ちたい」（二一二・13〜14）というのは口実で、「不埒な計画」（二一二・16）を胸に秘めているのかもしれないと思うようになる。
第四段	P二一三・2〈いったい、私は、〉〜P二一三・7〈おお、嫌だ。〉	「私」は何を待っているのか、「はっきりした形のものは何もない」（二一三・1）。「旦那さま」や「恋人」「友達」「お金」「亡霊」（二一三・6〜7）など、次々と「私」のなかに浮かぶが、そのどれも違う。
第五段	P二一三・8〈もっと和やかな、〉〜終わり	「私」が待っているものは言語化できないが、胸を躍らせるような期待に満ち溢れたものである。周囲の雰囲気に埋もれてしまいそうな日々の中で、それでも「私」は一心に待ち続ける。その自分の姿を「あなた」（二一三・14）にも覚えておいてほしい。

板書例

1 読む前に・第一段・第二段

読む前に
・「待つ」とはどんな行為？
・物語のかたちに注目
→一人称小説　「私」の視点で進む
・時代をおさえよう
→「大戦争」（「私」＝「二十歳の娘」）

第一段
「誰とも、分からぬ人」を迎えに

第二段
誰を待っているのか？
・人間でないかもしれない
・人間が嫌い　人間が怖い

◆「私」の変化
「大戦争」前
儀礼的なつきあいに違和感を抱く
母との親密な関係性を大切にする
「大戦争が始まって」から
画一化していく周囲に不安と孤独を感じる
◆「大戦争」…「（十七年一月）」
→昭和十六（一九四一）年十二月八日・真珠湾攻撃　《調べてみよう》

2 第三段・第四段

第三段
落ち着かない気持ちを抱えた「私」が向かう先→駅

◆何かを待つ「私」の心
期待→恐怖→諦め→覚悟
白昼の夢
→非現実的な空想
望遠鏡を逆にのぞいたみたい
→目の前を行き交う人々が、遠く小さく見える
…「私」の孤独をあらわす
「けしからぬ空想」「淫らな女」「軽はずみな空想」「不埒な計画」
→自分（自分が考えたこと）を否定的に捉える「私」

第四段
◆繰り返される問い
「誰を待っているのだろう」
旦那さま→恋人→お友達→お金→亡霊
…全て否定する「私」

3 第五段・まとめ

第五段
◆「私」が「待つ」ものもっと和やかな、ぱっと明るい、すばらしいもの→春のようなもの
→青葉→五月→麦畑を流れる清水
←どれも違う、けれども
胸を躍らせて…希望
一心に一心に…ひたむきな態度
◆不安であっても孤独であっても
「待つ」ことを選んだ「私」
◆「あなた」の違い
第四段落の「あなた」
→「私」に声を掛ける人
⇔
第五段落の「あなた」
→「胸を躍らせて待って」いるもの、「私」の物語を読んでいた読者

まとめ 書いてみよう
言語活動 1　時代状況／テーマ
言語活動 2　「私」／作者
作家紹介 太宰治
…戦時下の創作活動

発問例

・「導入の問い」のねらい

あなたが待ちたいものは、何ですか。

（ねらい）本文では「私」が待ちたいものについて想像し考察していくことになる。待ちたいものは、人それぞれであり、状況やタイミングによっても違う。まずは、生徒自身が待ちたいものに思いをめぐらせておくことによって、〈待つ〉という行為が持つ意味や効能について考えるきっかけにしたい。また、時代状況によって待つものに違いが出てくるかもしれないこと、同時にいかなる時代でも普遍的なものがあるかもしれないことに、授業後、思い至れるような導入としたい。

●二一〇ページ

問 **「一様に怒っているような顔」（6行目）「脇目も振らず」（7行目）という電車を降りた人々の動作からどのような様子が伝わるか。**

答 皆が同じ方向に、同じように進む様子。

補 同じ行動をする人々と「ぼんやり」（4行目）座る「私」との間にある距離、周囲と「私」の差を把握する。この周囲と「私」の間の差は、このあと次第に示されていく戦時体制における周囲の人々の様子と「私」との差にも繋がる。

●二一一ページ

問 **◉「苦しい気持ち」（3行目）になるのは、なぜか。**

答 「私」は、世間と儀礼的に関わっていくことに違和感を持っているから。

補 「大戦争」（11行目）が始まる以前における「私」の性格や態度を把握しておきたい。

●二一二ページ

問 **◉「自信を失ってしまった」（2行目）のは、なぜか。**

答 「大戦争」が始まることで、若い女性は工場での勤労奉仕や出征する男性との結婚がそれまで以上に要請される雰囲気が生まれ、今までの「私」の家事手伝いのあり方では、直接に役立っていないように感じさせられているから。

補 それまで「母と二人きり」（二一一・9）で感じていた幸福感や安心感が、外的な要因で脅かされ、「私」に動揺を齎していることを把握したい。

問 **「白昼の夢を見ている」（10行目）「望遠鏡を逆にのぞいたみたい」（11行目）からは「私」のどのような様子が読み取れるか。**

答 駅の改札を出て「私」の前を通り過ぎていく人々と自分が同じ場所（駅）にいるとは思えない、遠く隔てられた様子。

補 同じ場所にいながら、「私」だけが他の人々とは異なるという、「私」の孤独な様子を把握しておきたい。

問 **◉「不埒な計画」（16行目）と言っているのは、なぜか。**

答 「大戦争」が始まった状況では、身を粉にして働いて国の役に立つあり方以外が否定的に捉えられるという事態を内面化したうえで、自分の心のあり方を口にせざるを得なくなっているから。

補 戦争状態でなければ普通に口にすることができるような希望や願いが、「不埒」であると咎められてしまうような雰囲気について考えてみる。「私」はその雰囲気に一旦は飲み込まれてはいるが、「不埒」とわかっていても口に出していることから、そうした内面化への抵抗を示しているようにも捉えられる。

●二一三ページ

問 **これまで「私」は「何を待っているのでしょう」（二一二・12）、「誰を待っているのだろう」（2行目）と自問自答していたが、第五段落ではそうした問いかけはない。このような「私」**

の態度からは何が読み取れるか。「胸を躍らせて待っている」（10 行目）、「一心に一心に待っている」（12 行目）に注目して考えてみよう。

答「待つ」ものが何か具体的に言い表せなくても、「胸を躍らせて待っている」からは「待つ」ことに希望を見出す様子が、また「一心に一心に待っている」からは「待つ」ことに対する「私」の前向きでひたむきな態度が読み取れる。

補これまで「私」は「何を」「誰を」待っているのか、自問自答してはその答えを否定し具体的な答えを掴めずにいた。しかし第五段落では、「待つ」ものが具体的に何かということよりも、「私」にとって「待つ」ことが「胸を躍らせ」る希望の込められた行為であることが明確に示されている点がこれまで異なる点である。

問**なぜ「私」は「私を忘れないで下さいませ」（12 行目）、「どうか覚えていてくださいませ」（13 ～ 14 行目）と呼びかけるのか。**

答周囲の大多数とは異なる「私」のことを忘れないでほしいから。

補ここまで確認してきたように、戦時下、次第に周囲が画一化されるなかで「私」は少数者の立場にいることになる。この小説が、そうした今にも周囲に飲み込まれてしまいそうな、かすかな〈声〉に光を当てたものであることを把握しておきたい。

問**◉「私」が「あなた」にわざと教えないのは、なぜか。**

答こうした「胸を躍らせ」（10 行目）ることと「むなしく家に帰」（13 行目）ることを繰り返す「私」の態度を示しながら、待つことで未来に感じようとする希望の内実を、読者を含む不特定多数の「あなた」にも主体的に考えてもらおうとしているから。

補「私」にとって困難な状況が続くことは間違いないが、そうした中で、「私」はその希望を分かち合うことができる「あなた」が「私」を見つけることを待ち続けるという構図である。直接的には、「大戦争」の只中で何かを〈待つ〉ことへの呼びかけとも捉えられるが、抽象化すれば、広く、なかなか認められない思いや願いについて連帯できる相手を待ち続けるだけでなく、相手側の主体性を求めるようなニュアンスもある。

語句の研究

●二一〇ページ

4ぼんやり改札口を見ているのです。　「ぼんやり」とは、はっきりしない様子を意味するが、一般的に乗降客以外の人物が駅の改札を訪れるのは、誰かを待つ、誰かと待ち合わせるという明確な目的があってのことである。その改札口を「私」は「ぼんやり」見ているという。第一段落の「誰とも、分からぬ人を迎えに」（二一〇・1）と同じ意味合いである。

キー・ポイント　**ぼんやり**　「私」は自分の状態をこの後も「ぼんやり」（二一〇・8、二一一・14、二一二・4）と表現している。しかし、「私」の言う「ぼんやり」は表面的なもので、心の内では周囲と自分の違いに不安や孤独を感じ、葛藤している点に注意したい。加えて、「私」の前を通り過ぎていく周囲の人々に、この葛藤する声は聞こえないが、読者はそれを聞く立場にあるという点も、第五段落の「あなた」（二一三・14）という呼びかけと合わせて把握したい。

4上り下りの電車　電車の進む方向をさし、「上り」とは終点から起点へ進み、「下り」とは起点から終点へ進む。

5たくさんの人が電車の戸口から吐き出され、どやどや改札口にやって来て、　「吐き出され」「どやどや」は、いずれも人が一斉に勢いよく押し寄せる様子をあらわす。この人々が、「一様に、怒っているような顔」（二一〇・6）で「脇目も振らず歩いて」（二一〇・7）いくのである。

●二一一ページ

1お変わりありませんか、寒くなりました、などと言いたくもない挨拶を　「お変わりありませんか、寒くなりました」は時候の挨拶。こうした挨拶は、人とのコミュニケーションを円滑に行うためには必要なものだが、「私」はうわべだけの儀礼的な関係に違和感を持っているため「言いたくもない挨拶」と語っている。

5相手の人のけちな用心深さが悲しく　「けちな用心深さ」とは、相手が「私」を警戒して適当なお世辞を「私」に言う時の、世の中をやり過ごすためのうわべだけの態度をあらわす。「私」は自分だけではなく、相手もまた、儀礼的であることを指摘している。

6こわばった挨拶　ここでは、「言いたくもない挨拶」（二一一・2）や「当たらず障らずのお世辞」（二一一・4）、「もったいぶったうそ」（二一一・4）をさす。また、「こわばった」という表現からは、「私」が人との付き合いに窮屈さを感じていることがうかがえる。

キー・ポイント　**大戦争**　昭和十六（一九四一）年十二月八日の真珠湾攻撃から始まる米英との戦争は、周知のとおり、否応なく人々を戦争へと駆り立てていった。昭和十二（一九三七）年の盧溝橋事件を発端とする日中戦争においても、第一次近衛文麿内閣によって国民精神総動員運動が提唱され、思想や生活様式の統制がはかられたが、そうした人々を統制する動きは、この頃より一層強められていった。男性は召集され戦地へ、そして女性も〈報国〉や〈銃後〉のために動員されたのである。たとえば、真珠湾攻撃の少し前、十六（一九四一）年十月には、厚生省が人口政策の一環として結婚を奨励する通達を出し、結婚と〈報国〉が結びつけられて説かれていた（参考文献「日本女性史事典――トピックス１８６８―２０１５」日外アソシエーツ編集部編、平二十八）。「待つ」のなかで「二十歳の娘」

である「私」が、「私は誰を待っているのだろう。旦那さま。違う。恋人。違います」（二一三・6）と否定する背景に、このような当時の状況を含みこむことも可能だろう。また、「私」が「身を粉にして働いて、直接に、お役に立ちたい気持ち」（二一二・1）、「身を粉にして働いて、お役に立ちたいというのはうそで、本当は、そんな立派そうな口実」（二一二・13～14）と語る背景にも、女性が戦時体制の中で男性労働力の代わりとして動員される様子がうかがえる。こうした当時の状況が、家で母と縫い物をする生活を大切にしていた「私」に、「今までの生活に、自信を失ってしまった」（二一二・1～2）と語らせているのである。

●二一二ページ

10 白昼の夢を見ているような、　「白昼の夢」とは「白昼夢」のことをさし、真昼の夢のように非現実的な、の意。

10 人の往来のありさまも、望遠鏡を逆にのぞいたみたいに、小さく遠く思われて、世界がシンとなってしまうのです。　「往来」とは行ったり来たりすること。また、「望遠鏡」は遠くにある物を拡大して見る装置だが、ここで「私」は「望遠鏡を逆にのぞいたみたいに」と語っている。つまり、拡大とは反対に小さく見えてしまうわけだが、それは「私」の目の前を行き交う人々と自分との距離を示し、静まり返って遠く隔てられている様、「私」の孤独を表現している。

12 私は大変淫らな女なのかもしれない。　「淫ら」とは、本来性に関して慎みがなく、ふしだらなことをさす。ただし、ここで「私」が実際にどのようなことを考えているのかは、「けしからぬ空想」（二一二・8）、「軽はずみな空想」（二一二・14）、「不埒な計画」（二一二・16）の内実が語られていないのと同様に不明である。ここでは、「淫ら」の具体的内容が何かということよりも、人々の思想や生活、労働に対する統制が強まる中で、そうした統制の指し示す方向とは異なるもの、という捉え方も可能だろう。

13 大戦争が始まって、何だか不安で、身を粉にして働いて、お役に立ちたいというのはうそで、本当は、そんな立派そうな口実を設けて、　「身を粉にして働いて、お役に立ちたい」というのは、戦時下に奨励された生き方と捉えることができる。しかし「私」はそれを「立派そうな口実」と言う。ここからは「私」の批評性が読み取れよう。

●二一三ページ

9 麦畑を流れる清水　「麦畑」とは麦を栽培している畑をさす。「もっと和やかな、ぱっと明るい、すばらしいもの」（二一三・8）からの連想で「春」「青葉」「五月」と続いているので、「麦畑」も麦を収穫する頃の初夏の麦畑を流れる清水のすがすがしさ、美しさをさし、今の「私」をとり巻く窮屈さとは異なる明るさを示していると思われる。

注意する語句

（＊で用例を示した）

一様に…全部同じ様子であること。そろっているさま。同様。
＊人々は一様に黒い服を着ていた。

そそくさと…挙動が落ち着かず、せわしいさま。
＊彼女はそそくさと立ち上がった。

脇目も振らず…そのこと以外に目を向けず、一心不乱であるさま。
＊大学受験のため、脇目も振らず勉強した。

冷や水をかける…まるで冷水を浴びせるように、元気や活気を失わせる。
＊冷や水をかけられたように、会場は静かになった。

息が詰まる…緊張して息苦しくなる。息詰まる。
＊その部屋は、息が詰まるような雰囲気に包まれていた。

いい加減…深く考えないで、投げやりなさま。おざなり。無責任。
＊彼はいい加減な人だ。

当たらず障らず…差し支えのないよう気をつけて行動するさま。
＊彼は、どんな質問にも当たらず障らずの答えしか言わなかった。

もったいぶる…いかにも重々しげに振る舞う。もったいがる。
＊もったいぶらずに教えて欲しい。

身を粉にする…労力を惜しまず一心に努める。身を砕く。
＊このプロジェクトは身を粉にしてもやり遂げるべきだ。

けしからぬ…普通でない。不届きだ。あるまじきことだ。
＊何の挨拶もないとは、けしからぬ奴だ。

軽はずみ…深く考えずに言ったり、したりすること。軽率。
＊犯人の軽はずみな言動が目立つ。

不埒…決着の付かないこと。らちのあかないこと。また、法に外れたけしからぬこと。
＊不埒な考えが頭をよぎる。

胸を躍らせる…興奮して胸をわくわくさせる。
＊彼の帰宅の知らせを聞き、喜びに胸を踊らせた。

鑑賞

今回、「言語文化」の「近代2」に収録された太宰治「待つ」は、ごく短い小説ながら先行研究も比較的多く、考える点の多い小説である。本稿では、この「待つ」をより深く味わうために必要な観点として、「待つ」が創作集「女性」（博文館　昭十七）に収録されるまでの経緯と、「十二月八日」と「待つ」の関係を、「女性」の目次を示した上でまとめてみたい。もちろん、小説を過度に作家に還元する必要はないが、「待つ」が収録されるまでの経緯は、戦時下、一人の作家が自らの小説を世に送り出すための、密やかな格闘のようにも見えるのだ。

昭和十七（一九四二）年六月に博文館より刊行された創作集「女性」には、女性を語り手とする一人称小説が九篇収録されている。それは収録順に次の通りである（カッコ内は初出を示す）。

「十二月八日」（「婦人公論」昭十七・二）
「女生徒」（「文学界」昭十四・四）
「葉桜と魔笛」（「若草」昭十四・六）
「きりぎりす」（「新潮」昭十五・十一）
「燈籠」（「若草」昭十二・十）
「誰も知らぬ」（「若草」昭十五・四）
「皮膚と心」（「文学界」昭十四・十一）
「恥」（「婦人画報」昭十七・一）
「待つ」（雑誌・新聞未掲載）

右の通り、「十二月八日」から「恥」まではいずれも雑誌に掲載された後、この創作集に収録されたが、「待つ」はどこにも発表されていない。「教材のねらい」の「1　選定の理由」にあるように、「待つ」は「京都帝国大学新聞」の依頼を受けて書かれたものであるが、このあたりの経緯は、太宰の妻である津島美知子氏が、「コント「待つ」の初出誌は長い間わからなかった。これが「創作年表」の「昭和十七年三月号、コント、京都帝国大学新聞六枚」に当たることを「ユリイカ」の故伊達得夫氏が教えてくださった。伊達氏は当時、同新聞の編集部にいて太宰に原稿を依頼し書いてもらったが、「待つ」の内容が時局にふさわしくないという理由で原稿を返したと、伊達氏から直接聞いた。」（「回想の太宰治　増補改訂版」人文書院　平九）と詳細に説明している。

こうした美知子氏の詳細な説明に加えて、近年刊行された伊達得夫の遺稿集（回想録）の中に「待つ」に関する記述があったことにより、「待つ」研究は新たな局面を迎えつつある。伊達は「京都帝国大学新聞」編集部に所属していた頃を、「一回生の冬、太平洋戦争がはじまった。その翌年の京大新聞春休み号に、ぼくたちは太宰治の小説をもらうことを決定した。（略）約束の日までに太宰治の原稿は送られてきた。それは「待つ」という短篇であった。出征した夫をきょうも待っている――という若妻の手記の形のものであった。それは学年末の新聞四面に挿画入りで掲載されたが、しかしその新聞はだれの手にも渡らなかった。発行と同時に検閲によって発禁を命ぜられたのだ。太宰の小説が反戦的だというのがその理由であった。（ぼくたちは今、太宰治全集第五巻によってその小説「待つ」を読むことができる。（略））」（「詩人たち　ユリイカ抄」平凡社　平十七）と回想している。

「待つ」を読んだ後に伊達の回想を読むと、伊達の言う「待つ」が全く別物であることに気づくだろうし、また一方で「ぼくたちは今、太宰治全集第五巻によってその小説「待つ」を読むことができる」という部分を見れば、伊達の語る「待つ」は、現在の「待つ」と同じものを指している、と考えられるだろう。この伊達による回想については、近年、田中良彦が、伊達が当時の「京都帝国大学新聞」で起きていた別の発禁事件と混同した可能性を示しつつも「「反戦的」との回想は貴重で」、「若妻の手記」という形についても「記憶違いであっても「待つ」を考える際、示唆的である」（「太宰治「待つ」覚書き」「キリスト教文学」平二十四・八）と指摘し、玉田琴乃も「伊達に記憶違いがなかったのなら、「待つ」の第一稿は創作集『女性』で発表されたものとは異なる物語であったと考えられる」（「太宰治「待つ」論―成立の背景から見えてくるもの―」「学習院大学国語国文学会誌」令二・三）と述べている。「待つ」には別の原稿があり、しかもその内容は出征した夫を待つ妻による手記であったという伊達の回想は、「待つ」研究の今後の可能性を拓くものになるかもしれず、また先の田中氏、玉田氏の指摘はいずれも、「京都帝国大学新聞」と「待つ」の新たな関係の可能性を指し示している。

ここで、今度は太宰が「待つ」を創作集「女性」に追加したいと出版社に願い出た時の書簡を見てみたい。太宰は「女性」を刊行する博文館出版部の石光葆へ、次の書簡を送っている。

ただいま、別便速達で「待つ」といふ新原稿、お送り致しました。五枚の短篇ですが、あの「恥」といふ作品の次に（つまり、「恥」と「あとがき」の間に。）入れて下さいまし。最後の、しめくくりに適した作品だと思ひますから、どうか、そのやうに、お願ひ致します。（昭和十七年二月二十日付、博文館出版部石光葆宛「太宰治全集」第十二巻　筑摩書房　平十一）

右の書簡の後、太宰は同（昭十七）年二月二十四日にも石光葆に宛てて目次の組み方を指示しているが、すでに校正段階に進んだ創作集を、再度編み直すほどの「最後の、しめくくりに適した」〈何か〉が「待つ」にはあったということになる。

この創作集の冒頭に置かれた「十二月八日」は、小説家の妻で「園子」の母でもある「私」が綴る日記形式で書かれた小説である。「私」は十二月八日の有様を、ラジオ放送で聞いたり新聞を読んだりしては緊張した面持ちをみせているが、「町の様子は、少しも変つてゐない」「店先の様子も、人の会話も、平生とあまり変つてゐない。この静寂が、頼もしいのだ」と、いつもと変わらぬ日常と地続きに開戦の日を綴っていく。しかし末尾近くで園子を背負って夜道を歩く際、「燈火管制なのだ。もうこれは、演習でないのだ。心の異様に引きしまるのを覚える。でも、これは少し暗すぎるのではあるまいか」と言い、その暗闇に女学校の時に「吹雪の中をスキイで突破した時のおそろしさ」を重ねていく。この日常を襲う得体の知れない「おそろしさ」は、「待つ」の「私」が語る「大戦争が始まって」以降の周囲の様子と響き合うだろう。その意味で、「十二月八日」から始まる日常を覆う暗闇の先に、希望を込めた「待つ」という行為を見出した小説「待つ」は、「最後の、しめくくり」にふさわしいと言えよう。

＊「十二月八日」の本文は、「太宰治全集」第六巻（筑摩書房　平十）による。その際、旧字体は新字体に改め、ルビは省略した。

＊「待つ」については、拙稿「太宰治「待つ」論―「京都帝国大学新聞」との関連を踏まえつつ」（「大妻国文」平十五・三）、石橋紀俊「太宰治『待つ』論―待つことの倫理について―」（「学大国文」平二十六・十）、齋藤樹里「太宰治「待つ」論―待つてゐる「私」の〈姿勢〉―」（「國學院大學大学院　文学研究科論集」（平三十一・三）、等もあわせて参照。

参考

・「太宰治全集」第六巻　（十二月八日）　筑摩書房　平十

けふの日記は特別に、ていねいに書いて置きませう。昭和十六年の十二月八日には日本のまづしい家庭の主婦は、どんな一日を送つたか、ちよつと書いて置きませう。もう百年ほど経つて日本が紀元二千七百年の美しいお祝ひをしてゐる頃に、私の此の日記帳が、どこかの土蔵の隅から発見せられて、百年前の大事な日に、わが日本の主婦が、こんな生活をしてゐたといふ事がわかつたら、すこしは歴史の参考になるかも知れない。だから文章はたいへん下手でも、嘘だけは書かないやうに気を附ける事だ。なにせ紀元二千七百年を考慮にいれて書かなければならぬのだから、たいへんだ。でも、あんまり固くならない事にしよう。主人の批評に依れば、私の手紙やら日記やらの文章は、ただ真面目なばかりで、さうして感覚はひどく鈍いさうだ。センチメントといふものが、まるで無いので、文章がちつとも美しくないさうだ。本当に私は、幼少の頃から礼儀にばかりこだはつて、心はそんなに真面目でもないのだけれど、なんだかぎくしやくして、無邪気にはしやいで甘える事も出来ず、損ばかりしてゐる。慾が深すぎるせゐかも知れない。なほよく、反省をして見ませう。（略）

十二月八日。早朝、蒲団の中で、朝の仕度に気がせきながら、園子（今年六月生れの女児）に乳をやつてゐると、どこかのラジオが、はつきり聞えて来た。

「大本営陸海軍部発表。帝国陸海軍は今八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり。」

しめ切つた雨戸のすきまから、まつくらな私の部屋に、光のさし込むやうに強くあざやかに聞えた。二度、朗々と繰り返した。それを、じつと聞いてゐるうちに、私の人間は変つてしまつた。強い光線を受けて、からだが透明になるやうな感じ。あるひは、聖霊の息吹きを受けて、つめたい花びらをいちまい胸の中に宿したやうな気持ち。日本も、けさから、ちがふ日本になつたのだ。

隣室の主人にお知らせしようと思ひ、あなた、と言ひかけると直ぐに、

「知つてるよ。知つてるよ。」

と答へた。語気がけはしく、さすがに緊張の御様子である。いつもの朝寝坊が、けさに限つて、こんなに早くからお目覚めになつてゐるとは、不思議である。芸術家といふものは、勘の強いものださうだから、何か蟲の知らせとでもいふものがあつたのかも知れない。すこし感心する。けれども、それからたいへんまづい事をおつしやつたので、マイナスになつた。

「西太平洋つて、どの辺だね？　サンフランシスコかね？」

私はがつかりした。主人は、どういふものだか地理の知識は皆無なのである。西も東も、わからないのではないか、とさへ思はれる時がある。つい先日まで、南極が一ばん暑くて、北極が一ばん寒いと覚えてゐたのださうで、その告白を聞いた時には、私は主人の人格を疑ひさへしたのである。（略）

「西太平洋といへば、日本のはうの側の太平洋でせう。」

と私が言ふと、

「さうか。」と不機嫌さうに言ひ、しばらく考へて居られる御様子

で、「しかし、それは初耳だつた。アメリカが東で、日本が西といふのは気持の悪い事ぢやないか。日本は日出づる国と言はれ、また東亜とも言はれてゐるのだ。太陽は日本からだけ昇るものだとばかり僕は思つてゐたのだが、それぢや駄目だ。日本が東亜でなかつたといふのは、不愉快な話だ。なんとかして、日本が東で、アメリカが西と言ふ方法は無いものか。」

おつしやる事みな変である。主人の愛国心は、どうも極端すぎる。（略）

夕刊が来る。珍しく四ページだつた。「帝国・米英に宣戦を布告す」といふ活字の大きいこと。だいたい、けふ聞いたラジオニユウスのとほりの事が書かれてゐた。でも、また、隅々まで読んで、感激をあらたにした。

ひとりで夕飯をたべて、それから園子をおんぶして銭湯に行つた。ああ、園子をお湯にいれるのが、私の生活で一ばん一ばん楽しい時だ。園子は、お湯が好きで、お湯にいれると、とてもおとなしい。お湯の中では、手足をちぢこめ、抱いてゐる私の顔を、じつと見上げてゐる。ちよつと、不安なやうな気もするのだらう。よその人も、ご自分の赤ちやんが可愛くて可愛くて、たまらない様子で、お湯にいれる時は、みんなめいめいの赤ちやんに頬ずりしてゐる。園子のおなかは、ぶんまはしで画いたやうにまんまるで、ゴム鞠のやうに白く柔く、この中に小さい胃だの腸だのが、本当にちやんとそなはつてゐるのかしらと不思議な気さへする。そしてそのおなかの真ん中より少し下に梅の花の様なおへそが附いてゐる。足といひ、手といひ、その美しいこと、可愛いこと、どうしても夢中になつてしまふ。どんな着物を着せようが、裸身の可愛さには及ばない。お湯からあげて着物を着せる時には、とても惜しい気がする。もつと裸身を抱いてゐたい。

銭湯へ行く時には、道も明るかつたのに、帰る時には、もう真つ暗だつた。燈火管制なのだ。もうこれは、演習でないのだ。心の異様に引きしまるのを覚える。でも、これは少し暗すぎるのではあるまいか。こんな暗い道、今まで歩いた事がない。（略）女学校四年生の時、野澤温泉から木島まで吹雪の中をスキイで突破した時のおそろしさを、ふいと思ひ出した。あの時のリユツクサツクの代りに、いまは背中に園子が眠つてゐる。園子は何も知らずに眠つてゐる。

背後から、我が大君に召されえたあるう、と実に調子のはづれた歌をうたひながら、乱暴な足どりで歩いて来る男がある。ゴホンゴホンと二つ、特徴のある咳をしたので、私には、はつきりわかつた。

「園子が難儀してゐますよ。」

と私が言つたら、

「なあんだ。」と大きな声で言つて、「お前たちには、信仰が無いから、こんな夜道にも難儀するのだ。僕には、信仰があるから、夜道もなお白昼の如しだね。ついて来い。」

と、どんどん先に立つて歩きました。

どこまで正気なのか、本当に、呆れた主人であります。

深い学びのために
学習のポイントの解答例

1　「大戦争」が始まる前と後で、「私」の心情にはどのような変化が生まれているのか、考えてみよう。

【答】　「私」はもともと周囲との儀礼的なつきあいに違和感を持っており、家にいる母と暗黙のうちに成り立つ親密な関係性を大切にしながら暮らしていたが、「大戦争」が始まることでやるべきことを画一化していく周囲の雰囲気に、不安と孤独を感じるようになってきていると思われる。

2　小説内で「私」が提示している「待つ」対象を順番に抜き出し、その変化について考えてみよう。

【答】　最初は「誰とも、分からぬ人」（二一〇・1）や「誰か」（二一〇・7）というように大まかに人間を指していたが、「人間でないかもしれない」（二一〇・13）とも述べる。しかし戦争状態になってそれまでの母娘での生活に自信を失った後は、「どなたか」（二一二・5）が現れたら「その人に私の命を差し上げよう」（二一二・7）と思いもする。一度は「はっきりした形のもの」（二一三・2）ではないと打ち明け、続けて、想像上の「笑って私に声をかける」「あなた」（二一三・4）も否定する。「旦那さま」、「恋人」（二一三・6）と、制度に則った婚姻関係から私的な関係性に移り、さらに男女関係から同性を含めた「友達」（二一三・7）となる。そして人同士の関係性から、欲望の象徴物である「お金」（二一三・7）に、さらには現実世界からは離れた「亡霊」（二一三・7）さえ登場する。最後には、「もっと和やかな、ぱっと明るい、すばらしいもの」（二一三・8）という、「私」が待つことで感じていく雰囲気へと向かい、「春のようなもの」（二一三・8～9）、「青葉」、「五月」、「麦畑を流れる清水」（二一三・9）と列挙しては否定していく。結局は、何か分からないまま待つことで「胸を躍らせ」ている「私」の態度を前景化していき、そのように具体的な対象を示せない「私」への連帯を、「あなた」に求める構図を描いていく。

3　第四段落の「あなた」と第五段落の「あなた」が指す内容の違いについて考えてみよう。

【答】　第四段落では、私に声をかけるかもしれない人物である具体的な「誰か」に向けた否定だが、第五段落では、「私」が待ちながら心躍らせている何かであると共に、本作を読んできた読者に「私」のような存在を忘れないでほしいという訴えかけにもなっている。

言葉と表現の解答例

1　「私」が直前の発言を否定する表現や、反復される「…ない」という表現を抜き出し、その多様な否定的表現がもたらす

効果について考えてみよう。

【答】　例えば「ない」およびその連用形の「なく」を抜き出すと、以下のようになる。

「人間でないかもしれない」（二一〇・12）、「などと言いたくもない挨拶を」（二一一・2）、「世界中にいないような」（二一一・3）、「嫌で嫌でたならなくなります」（二一一・6）、「よほどのことでもない限り」（二一一・8）、「ちっとも落ち着かなく」（二一一・16）、「黙って座っていられない思い」（二一二・3）、「現れたときにはしかたがない」（二一二・6）、「何だか頼りない気持ち」（二一二・10）、「ねらっているのかもしれない」（二一二・15）、「はっきりした形のものは何もない」（二一三・1）、「あなたではない」（二一三・5～6）、「何だか、分からない」（二一三・8）、「あれでもない、これでもない」（二一三・11）、「私を忘れないでくださいませ」（二一三・12）

「ない」という同じ響きで、形容詞、形容詞の一部、助動詞を含むことになる。否定から不確実な判断など多様な意味があるが、対象のイメージを読者に想起させてはずらしていくことで、「私」の気持ちや価値観の揺れ動きを巧みに表現している。さらに「いいえ」（二一〇・12、二一一・1）を繰り返したり、「違う」（二一三・5）と「違います」（二一三・5～6）を重ねたりと、打ち消し表現を文章全体に溶け込ませることで、あたかも聞き手の「あなた」に対して言葉を選びながら、待つことの意味を探っているようにも捉えられる。

2　改行が少なく、長い文章と短い文章が交互に繰り返されているが、その効果について考えてみよう。

【答】　例：「私」がとめどなく語ったりしているように読めるし、「私」の意識の流れをそのまま写しているような印象も生まれる。何かを待っていることを「私」が他者に伝えるための意識の整理に時間がかかったり、言葉に混乱や逡巡が含まれることを表すような効果もある。

言語活動の解答例

1　時代状況が表れている部分はどこか、また、それが作品のテーマとどのようにかかわっているか、考えてみよう。

【答】時代状況：「大戦争が始まって、周囲がいよいよひどく緊張してまいりましてからは」（二一一・11～13）、「大戦争が始まって、何だか不安で、身を粉にして働いて」（二一二・13）

テーマとの関わり：「大戦争」は人々を戦時体制へと動員し、男性を戦地へ、女性は〈報国〉や〈銃後〉の担い手として、それぞれの役割を強いていった。「私」の「待つ」という姿勢は、そうした時代が求める生き方とは異なる生き方（言葉にできない何かに希望を託して「待つ」こと）を選んだことへの決意表明といえる。

【ポイント】　「大戦争」が始まった時期に駅で何かを待つ「二十歳の娘」（二一三・13）を語り手にすることに注目したい。同世代の男性は戦時下において、次々と兵士として駅で見送られ戦場

へと向かっていく。一方、女性は「銃後」を守る存在として、戦時色の強いジャーナリズムなどでも取り上げられて一義的な主体化を強いられていくことには触れたいところである。そうした戦時状態の只中で、到来していない何かを待ち続けるという「私」の態度へと焦点を絞り、「待つ」というタイトルになっている意味について考えてみたい。

2　「私」が何を待っているかが明確でないのはなぜか、「私」の気持ちと、作者の立場の両面から考えてみよう。

【答】　「私」の側から考えれば、待っているものが何かということよりも、戦時体制に順応していく周囲との違和を示すものとして希望を込めた「待つ」という姿勢こそが必要だから。

「作家の立場」としては、「待つ」内容を具体的に書いても軍部の検閲や出版社の自己検閲によって削除や書き直しを命じられる可能性がある。それならば、具体的に書き記すよりも、戦時下において「待つ」とはどのような意味を持つのか、読者の側にほのめかし、委ねることに意味があるから。

【ポイント】　「私」の側から考えれば、多くの人々が待っているものを具体的に列挙することはできても、だからといって、「私」の心に揺曳する微かな希望のような何かを、そうした限定された対象へと簡単には置き換えたくはない。「私」には、戦時下においては周囲から「不埒」に捉えられてしまうかもしれない危険性を知った上で、それでもなお、違和を表明して自分自身の思いを大切にすることこそが重要である。

作者の立場から考えれば、戦時下、軍部からの検閲や出版社の自己検閲等によって書き表しにくかった主張を、読者にほのめかしながら伝えることができる方法として、戦時体制の片隅に生きる「私」を語り手とする一人称小説が有効であると判断したのではないかと考えることができる。

（井原あや）